

都市社会における言語分化 Peter Trudgill(1974a)をめぐって

橋 内 武

筆者は、日本英文学会中国四国支部第27回大会(1974年10月20日、愛媛大学教養部)で「都市社会における言語分化 — Peter Trudgill(1974)をめぐって」と題する研究発表を行った。本稿はそれに基づいて文章化したものである。

ここで取り上げる本は

Trudgill, Peter(1974a) *The Social Differentiation of English in Norwich*. London: Cambridge University Pressである。Trudgill(1974a)としたのは、同じ年に出たTrudgill(1974b) *Sociolinguistics: An Introduction*. Pelican Books. についても本稿で多少言及するからである。

1. 著者Peter Trudgill とその業績
2. 社会言語学という分野
3. 都市社会の方言学
4. 梗概『ノーリ ッチ英語の社会分化』
5. まとめと評価

1 著者Peter Trudgill とその業績

著者Peter Trudgill は、1943年にイングランドのノーリ ッチで生まれ、中等教育までをノーリ ッチ市で受けた後、ケンブリッジ大学キングズカレッジで近代語を学んだ。1971年にエディンバラ大学からPh.D. の学位を得た。1970年以来レディング大学(U. of Reading) 言語科学部の講師である。ギリシャやノルウェーでも言語調査を行い、ノルウェーとアメリカで講じたこともある。

次にTrudgill の業績を評者の知る範囲で列举してみよう。

1971 'The social differentiation of English in Norwich'

(University of Edinburgh: unpublished Ph.D. thesis) — 評者

未見

1972 'Sex, covert prestige and linguistic change in the

urban British English of Norwich', *Language in Society* I, 179-95.

1973 'Phonological rules and sociolinguistic variation in Norwich', in Bailey, C-J. and R.W. Shuy, ed., *New ways of Analysing Variation in English*.

Washington, D.C.: Georgetown University Press. 149-63

1974a *The social Differentiation of English in Norwich*.

London: Cambridge University Press. Abridged and revised version of 1971.

1974b *Sociolinguistics: an Introduction* Harmondsworth:

Penguin Books.

以上の事実から Trudgill は

- (1) 30 年そこそこの新進気鋭であり
- (2) ノーリッチという都市社会の言語を調査、分析することに力を注いできていること
- (3) 特殊研究(1974a)と概論書(1974b)を含む2冊の本を公けにしていること
- (4) 国外での経験も豊富で、既に英国を代表する社会言語学者と目されていることがわかる。

2 社会言語学という分野

Trudgill(1974a:1, 1974b:32-33)は、社会言語学は言語学の一分野であり、言語を社会的文化的現象として捉え、社会科学の対象、方法、発見を言語研究に利用するものであるとしている。が、では一体その社会科学とは何を指すのか。著者は、この間にこう答える。社会言語学は、言語学プラス社会学に留まらない。他の社会科学——(社会)人類学も(人文・社会)地理学ともかかわっているのである。つまり社会言語学は、社会学的言語学と人類学的言語学と地理学的言語学の3つから成り立つのである。社会言語学は言語学と社会科学の接点に成立するというのなら評者は社会心理学的言語学¹もこれに一枚加わる資格があると考ええる。

社会学の対象(社会階層論や社会変動論)や方法(社会調査法)を借りるということは Labov(1966)のニューヨーク調査以来行われ、その有効性が認められてきているし、人類学も親族名称語彙等の成分分析に威力を発揮してきた²。しかし、地理学と言語学の交渉は、方言の分布を論ずる言語地理学はさておき、社会言語学の枠組みの中ではまだ正当な位置を与えられてはいない。著者は、最近の理論地理学の研究成果³——中心地理論、都市地域論、立地論、空間的拡散理論を学び、それらを都市言語調査に採用したのである。(とくに2.2.標本抽出法の項と7.9.地理学的要

因の項を参照せよ。)

3 都市社会の方言学 : Labov(1966)と比べて

社会言語学が60年代のいつ頃成立したかは説の分れる所であるが、Labov(1966)のニューヨーク市英語の研究が、この若い学問を育てる推進力となったことは間違いない。これに続いてLevine, L. and H. J. Crockett(1966)やShuy, R. W., Wolfram, W. A. and Riley, W. K.(1967)等の都市言語調査報告が発表されている。しかし、これらはいずれも米国で行われたものであった。

英国では、Labov(1966)に類する研究は60年代に出現しなかった。言語調査の報告と言えば、長い間村落社会の方言を調べるものとされてきた。それはそれなりに、イングランド(リーズ大学編)やスコットランド(エデンバラ大学編)の言語地図を完成させてはいたが、都市社会の言語分化(ないしは、都市言語の社会分化)に関する研究は1971年を待つ外なかった。この年に2つの学位論文Heath, C. D.(1971)とTrudgill, P. J.(1971)が提出されたのである。前者はStaffordshireのCannock方言を扱い、後者はNorfolkのNorwich方言を対象としている。この2つが英国都市社会言語学の出発点となったのである。

筆者はここで話を後者Trudgillに絞るわけだが、Trudgill(1974a)をすでに古典となっているLabov(1966)と引き比べてみよう。

- (1) 共にPhD論文(Labov 1964, Trudgill 1971)を多少修正した上で世に問うた処女作であって、社会言語学上重要なモノグラフである。
- (2) 共に社会学(とくに社会階層論、社会変動論、社会調査法)の知識をよくこなしながら各々の研究に援用している。
- (3) 既に述べたようにTrudgillは理論言語学の最近の研究成果をも巧みに利用している。
- (4) 共に言語を社会階層(職業、収入、財産、学歴などを含む)や性別や年齢との相関において捉えている。
- (5) 共に言語変化は同時代に行っているものであり、こういった異質多様性に富む言語共同体に属するある社会集団が変革の担い手になっていることを指摘している。
- (6) 共に都市の方言を扱っている。双方の国においてそれまで方言研究と言えば村落社会の方言を調べることや言語地理学的研究を指すようなものであったのに対して、都市社会方言学とでも称すべき分野を切り開いた点は特筆に値する。
- (7) Labovの扱ったのは米国一の大都会New York(マンハッタン島のロウアー・イースト・サイド)であるのに対して、Trudgillの対象としたのはイングランドの小都市ノーリッ

チ(人口16万—1966年)である。

このように列挙してみると、Labov(1966)とTrudgill(1974a)の類似性と相違性がよくわかる。そしてその類似性から推して行くならば、Trudgillを英国のLabovと称してもあながち不適當とは限らないだろう。

4 梗概『ノーリッチ英語の社会分化』

長い前置きはこの位にして、この書物の中身を紹介しよう。先ず、目次を掲げる。

- 0 序論
- 1 ノーリッチ
- 2 標本
- 3 社会的指標
- 4 場面と質問紙
- 5 文法素性の社会分化
- 6 音韻変数
- 7 音韻変数と社会学的変数の相関
- 8 ノーリッチ 英語を貫く体系

以下、順を追って章毎にまとめてみることにする。先ず序論で、著者はこの書物が社会言語学(社会学的言語学プラス地理学的言語学)上の研究であって、当該都市の言語を初めて組織的に記述したばかりでなく、英国での社会学的都市方言学に先鞭を付けたと自ら強調している。

第1章 ノーリッチ——ここで著者はイースト・アングリア地方(ノーフォークやサフォークを含む)の地域的性格とこの地方の中心地ノーリッチの性格を交通、人口、社会経済構造の面から明らかにしている。また、ノーリッチ市域内の地域分化についても述べているが、これは第7章第9節(音変化の地理的要因)につながる。

第2章ではっきりさせていることは

- (1) 標本(被験者)をどのようにして抽出したか
- (2) その標本は、社会的背景の差異の他に居住地区や住居形式のちがいにどのようなばらつきを示しているか
- (3) 予定した被験者のうち何人と実際面接したか、また資料として使えたのはそのうち何人か
- (4) 標本の性格は、年令集団や職業集団や最終学歴のちがいでどのような比率を示しているか、である。

第3章では社会的指標を扱う。著者は、今までの社会言語学的研究で使われてきた変数は単一の

指標（例えば学歴）からだけで測られていたが、それでは目が荒すぎるとし、もっとキメの細かい方式を構じている。それは、先ず6つの指標（職業、収入、教育、住居形式、居住地区、父親の職業）の各々に0から5までの数（段階）を与えておき、被験者は各々指標毎に数値を与えられる。次に、そうやって定められた6つの指標の数値を加算する。その結果出てくるのがその被験者の社会階層指標平均値であって、このような算定法は「多指標加算方式」とでも称すべきものである。

場面が変ればことばのスタイルも変わる。

—— このことに着目して、第4章では面接調査で引き出す5つのスタイル

- (1) 自由談話
- (2) 公式の談話
- (3) 文章を読むスタイル
- (4) 単語表を読むスタイル
- (5) 類音語の対を読むスタイル

を説明している。

次は第5章 文法素性の社会分化について。——

次章第6章から第8章までの3章は社会言語学的音韻論に紙面が費されているから、この研究の焦点はそこにあると思われる。が、著者は自分の方法論の妥当性を検証するために、文法論の分野で予備調査を行っている（これが第5章である）。この調査は、3人称単数現在の形が—sまたは—esの形を採るかとならないかは、社会階層のちがいや場面差によっているのではないかという仮説に基づくものであり、著者はこれを見事に実証した。

さて、第6章 音韻変数に入る。ここでは、先ずイースト・アングリア英語一般の音韻的特徴を5つ挙げ、次に同じイースト・アングリアにありながら、この地方の農村部で話されている英語とノーリッチという都市で使われている英語とでは異なる点も少くないので、それを17項目にわたって列挙している。それから著者はノーリッチ英語に見られる子音と母音の変数（変異形）をくまなく洗っている。

音韻変数（第6章参照）と社会的変数（第3・第4章参照）との相互関係を明らかにするのが第7章の役割である。類音語の対を読む場合を除く4つのスタイルにみる各被験者の音韻変数、各人のスタイル毎の指標、それに当人の社会階層指標平均値を用いて著者は下記の作業を行った。

- (1) 音韻変数の顕示と社会階層や場面や性の間にある相関を調べること
- (2) どの音韻変数が社会階層差に従っていて、どの変数がスタイルのちがいに係わっているかを発見すること
- (3) どの音韻変数がある言語行動の場面を表わす上で一番重要であり、どの音韻変数が話し手の社

会階層を示すことでは何よりも手がかりになるかを見つけ出すこと

第8章で著者は、ノーリッチ英語に現われるあらゆる形式が共通の基底構造から生じるのだとして、この地域社会を貫く方言の体系(diasystem)を説明している。方言全体を貫く体系は基底にある単一の体系的音韻体系と音韻顕示化規則、母音変異規則など一連の規則から成り立っている。方言の分析に生成音韻論の説明原理を用いているわけである。

本文の後に付録(質問紙、被験者に読んでもらう単語表、類音語の対、短かな話)が付いているだけでなく、本文中に言語地図が12と図表が多数載っているが、これは本書の特徴の1つをなして視覚的理解を容易にしている。

5 まとめと評価

最後まで読んできて、評者は著者の才能と博識に脱帽した。この書物は共著ではない。しかし、評者はそこに3人の顔 — 統計や調査に強い社会学者、理論派の地理学者、音韻論に秀でた言語学者を見る。Trudgill は今年(1975年)32才を迎えた少壮の気鋭である。この『ノーリッチ英語の社会分化』と同じ年に出した『社会言語学入門』

1. 社会言語学 — 言語と社会
2. 言語と社会階層
3. 言語と民族
4. 言語と性
5. 言語と場面
6. 言語と国家
7. 言語と地理

文献案内

の2冊をもってして、すでに大物であることが判明した。あとは今後の活躍に注目するばかりである。

いささか蛇足めくが、カバーに印刷してある紹介文を邦訳して稿を結ぶことにしよう。

一体言語と社会階層とは、どういう関係になっているのだろうか。同じ階層の男性と女性とでは、どの程度ことばがちがうのだろうか。場面の差によってことばはどう変わるだろうか。

『ノーリッチ英語の社会分化』は、言語と社会の関係についてのこのような質問に答えようとするものである。

この本は、英国で行われた最初の社会言語学的都市方言調査の結果を報告するものであり、ことば共同体で蒐集した言語のデータを言語理論の諸問題に適用させる試みでもある。終章では、変異する都市方言のデータを音韻理論にどう意味付けるかを論じ、今日の言語学は言語変化をどのようにして扱い得るのかを検討している。

この研究書は、全てが理論的であるというわけではない。ノーリッチという都市で話されている様々な社会方言と「なまり」の分析を含み、この都市の英語が周辺の村落方言からどのようにして発達したかを明らかにしている。このようにノーリッチ英語の性格を論じているが、これだけで様々な非標準英語に関する知識への新たな貢献である。ところで、非標準英語こそ大抵の英語の話し手が生れつき使っていることばであり、教育のある分野に携わっている人々の間でますます注目を集めているものである。この本はさらに社会的圧力がどのようにして言語変化を導いていくのか、また言語変化がどのようにしてことば共同体を貫いて拡がっていくのかという点を検討している。著者は都市方言調査法についても述べているが、これは将来（特に英国で）この種の調査をする人々に役立つと思う。

<注>

- 1) See Robinson, W.P. (1973)
Shuy, R. & R. Fasold eds (1973)
日本社会心理学会 (1974)
- 2) See Burling, R. (1970) または 高原脩、本名信行訳 (1974)
- 3) 我国で刊行されたものとしては、石水照雄 (1974)、石水照雄・奥野隆史 (1973)、バンジ・W. 著、西村嘉助訳 (1970)、森川洋 (1974) などがある。

<参考文献> (著者 Trudgill のものは除く)

[邦文]

石水照雄 1974 『都市の空間構造理論』 大明堂

石水照雄・奥野隆史 1973 『計量地理学』 共立出版

高原 脩・本名信行訳 (バーリング・R 著) 1974 『言語と文化 — 言語人類学の視点から』
ミネルヴァ書房

西村嘉助訳 (バンジ・W 著) 1970 『理論地理学』 大明堂

日本社会心理学会 1974 『年報社会心理学 第15号 (特集: ことば、シンボル、コミュニケーション)』

森川 洋 1974 『中心地研究 — 理論、研究動向および実証』 大明堂

[英文]

Bunge, W. 1966. *Theoretical Geography*. Lund: Royal University of Lund.

Burling, R. 1970. *Man' Many Voices : Language in Its Cultural Context*. New York: Holt, Rinehart & Winston.

Heath, C. D. 1971. "A Study of Speech Patterns in the Urban District of Cannock, Staffordshire." University of Leeds: unpublished Ph. D. thesis.

Labov, W. 1966. "Social Stratification of English in New York City. Washington, D.C.: Center for Applied Linguistics.

Levine, L & H.J. Crockett 1966. "Speech Variation in a Piedment Community: Postvocalic r" in Lieberman ed. *Explorations in Sociolinguistics*. The Hague: Mouton.

Robinson, W.P. 1973. *Language and Social Behavior*. Harmondsworth : Penguin Books.

Shuy, R. & R. Fasold ed. 1973. *Language Attitudes : Current Trends and Prospects*. Washington, D.C. : Georgetown University Press.

Shuy, R.W., W.A. Wolfram & W.K. Wiley 1967. *Linguistic Correlates of Social Stratification in Detroit Speech*. U.S. Office of Education : Final Report, Cooperative Research Project 6-1347.

追記 脱稿後、下記の論文を手にした。本稿で触れた地理学的言語学(とくに、言語変化研究への地理学理論の援用)についての著者Trudgillの見解が、より鮮明に表われている。

Trudgill, P. 1974 C. "Linguistic Change and Diffusion: Description and Explanation in Sociolinguistic Dialect Geography." *Language in Society* 3, 215-246.

1975年1月20日